

## 【要旨】

# 素材における予測不可能な変化を拓く ——空間 / 状況 / 場の拡張をめぐる

美術研究科 美術専攻 壁画第一研究室 後期博士課程 3年 福田周平

## 【研究内容】

筆者は2015年より現在に至るまで銀箔を用いた作品を継続して制作してきた。これまでの制作では一貫して素材をめぐる、その予測不可能な変化を積極的に受け入れ、変化そのものを作品として取り入れる姿勢を取ってきた。そしてそれは、キュレーションの視点を持つ更なる展開へと拡張していった。本論では初期の銀箔を用いた平面作品シリーズから、その後立体作品へと移行したロール状の作品、そしてさらに立体作品から展開した空間と観者との間に起きた領域横断的な試み、そしてそこから延伸してキュレーションの視点をもったプロジェクト型の作品が主な分析対象となる。

上記の一連の作品を研究対象に、本論では「素材における予測不可能な変化」を主軸のリサーチテーマとして掲げる。作品における物質としての素材とそれを取り巻く環境との関係性について、そしてそれがいかにして拡張していったのかについて、具体的な事例を取り上げて分析しながら論じていく。

また、これらの論述は1950年代から70年代にかけて台頭した、具体美術協会、ミニマル・アート、もの派、アルテ・ポーヴェラ、シュポール/シュルファスといった、素材や場について多く言及された美術史的動向を先行研究に用いて、適宜事例に沿って、それらとの相違点や類似点の比較を試みる。

本論では全4章により構成される。以下各章の要旨である。第1章では、銀箔の平面作品シリーズをめぐる、その制作に至るまでの契機について述べていく。そこから展開する銀箔をはじめとする素材が起こす化学反応によって生み出された作品と作品を取り巻く環境の関係性について分析を試みる。そして作品を取り巻く環境を“空間”と捉え、“空間”への展開について論じていく。続く第2章では、先述した平面作品シリーズから2020年より展開した銀箔を使用した立体作品シリーズについて、平面から立体への展開の契機を先行研究として挙げられるもの派とミニマルアートにおけるコンセプトとの関連性に言及しながら明らかにしていく。平面作品シリーズから立体への展開において、作品を取り巻く環境の“空間”から“状況”への転換を主な軸として述べていく。第3章ではさらに立体作品からその先に展開する、近年取り組んできた自然との関係性を探る作品制作を事例に、それを“場”と定義し、それまでの“空間”や“状況”からの拡張として位置付ける。一方で、作品素材の場所性をめぐる定義が拡張していく中で筆者自身が感じた限界について、自己批判的な分析を試みていく。特にこれまでの制作について、社会的・政治的コンテクストの欠乏を自己認識する過程を述べ、今後の課題として

提示していく。第4章では、前3章で言及してきた、作品の素材における予測不可能な可能性と受け入れ、“空間”から“状況”、“場”へと拓いていった流れと別軸に延伸していった、キュレーションの視点を持つプロジェクト型の試みについて述べていく。これまでの作品制作のみの視点から、キュレーションの視点を取り入れた過程について言及し、筆者自身の視点の移り変わりについて分析を試みる。事例としては、空間と観者との間に起こる関係性を領域横断的な試みとして位置づける、A03と「臨江閣[茶室]プロジェクト」、A03αをめぐる一連の展開について詳細に述べていく。加えて、A03にて社会的文脈との接続を試みた「－ウクライナ芸術支援プログラム－[with Peace]」について詳述する。これは、作品を取り巻く“環境”への定義を拡張させ、社会文脈への関心の拡張への展開をしていったプロジェクトである。そのため、キュレーションの視点をもつ一連の試みが社会の枠組みの中でどういった位置づけを持てるのかについて分析していく。

以上4章によって、筆者のこれまでの制作において主軸となってきた素材をにおける予測不可能な変化について言語化することで、どのようにその変化を作品として取り込んできたかを明らかにする。また、その変遷を“空間”、“状況”、“場”と分類し、定義することによって、作品と作品を取り巻く環境の関係性がいかにして展開し、拡張していったかについて分析する。また、その延伸として生じたキュレーションの視点を持つ動向についても言及することで、筆者のこれまでの制作を網羅的に俯瞰して捉えることを試みる。